

# サロベツだより



サロベツ学会会報 No. 3  
2012年5月

## 目 次

サロベツ雑感	高橋英紀	1
1. 会員からのたより		
(1) いっぱいの水 (2)	橋 治国	2
(2) サロベツへの道 (1) 振老の渡し	高橋英紀	3
2. 活動報告		
(1) サロベツ湿原保全ボランティア活動	神谷光彦・高橋英紀	5
(2) 活動報告会の開催		
i) 地域ボランティアの活動状況	稲垣順子	7
ii) インドネシアの湿原の子供たちとの交流について	高橋英紀	7
3) 野鳥観察会の開催		7
3. 会議報告		
(1) 総 会		8
(2) 事業報告・事業計画		9
(3) 決算報告・事業予算		10

## 表紙の写真

1. 昨年出来た新木道で、旧木道では見れなかった花を見つけましたので報告します(村元)。  
左上：キツリフネ (木道出口付近で「キツリフネ」の群落を見つけました)  
左中：コタヌキモ  
(旧木道脇で3年ほど前に消えた「コモタヌキモ」の群生が見つかりました)  
右上：ミズチドリ  
(3年ほど前から探そうと思っていた「ミズチドリ」が木道脇で1株だけ見つけました)
2. 左下：湿原再生のためのボランティア活動(その4)に参加した皆さん(2011年10月8日)
3. 右下：北大博物館見学に訪れたサロベツの子供たち(クラーク博士像前2012年3月27日)

## 編集者より

この号も予定期日より大分おくれた発行となりました。申し訳ありません。「会員だより」が2件で、かなりさびしい状況です。この部分をどのように充実させるか、皆様のお知恵をお借りしたいものです(高橋英紀)。

## サロベツ雑感 ー出会いの不思議スポットー

高橋 英紀

私のサロベツ湿原との出会いは昭和 38 年（1963 年）の夏に始まります。北大農学部 3 年の時でした。いわゆるサロベツ総合調査の気象部門が実施している特殊気象観測の観測員として参加しました。村元さんより 4 年あと、稲垣さんより 6 年ほど早いサロベツとのお出会いです。その時、はじめて湿原に直に触れましたが、その驚きと感動は言うまでもありません。その後、50 年近く経ちましたが、有難いことにサロベツとのお付き合いは続いています。

サロベツとのお付き合い 50 年の中で、様々な人々と出会い、つながった糸をたどっていくと、新たな出会いがありました。また、よく調べてみると、気が付かなかった過去に縁があったと言うこともありました。私にとって、これも不思議な縁で読むことになった村上春樹の「海辺のカフカ」に出てくる様な人を呼び寄せる幻想的で不思議なスポットの一つがサロベツです。もう一つはカリマンタン（ボルネオ島）の熱帯泥炭地ですが。

その不思議な出会いの例です。8 年ほど前に橋先生が主催した湿地セミナーが豊富町セミナーハウスで開催され、夕食後の自由なスピーチで佐藤吉一さんが朴訥な語り口で昭和 40 年代はじめのころの郵便配達時のサロベツ地域の状況を紹介したのがきっかけでした。そのころ、春先の融雪出水で道路が水没し郵便の配達が大変だったとの話題から、当時の写真の話となり、趣味で



昭和 41 年 11 月 6 日道道豊富ー浜頓別線開通

写真を撮っていた羽根さん親子を紹介していただきました。その中の幾枚かを電子画像として複製し羽根親子写真集として CD にまとめさせてもらいました。また、佐々木 登さんの「サロベツ原野（昭和 43 年刊）」を貸していただいて、佐々木さんの苦労と努力の記録を読んで感動したことを、ご自身の著書「続北海道開発にかけた人間ドラマとフロンティア精神（平成 17 年刊）」を寄贈して下さった坂本一之さん（昭和 57 年

当時稚内開建次長）への礼状に書きました。それが縁で、坂本さんが主催する「北海道開発パイオニア研究会」に入会することになり、そこで橋本 亨さん（元サロベツ総合調査事務所長、昭和 42～44 年）と知り合うこととなりました。そして「サロベツ原野」の話をする、橋本さんが豊富在住のときに佐々木さんに著書としてまとめるよう勧めた形となったとのことでした。たしかに、「サロベツ原野」のまえがきの謝辞に橋本所長のおかげと載っていました。

今から考えてみると昭和 40 年前後のサロベツには不思議に様々な人が集まり、いろいろな活動をしていたと思います。私事になりますが私の長兄と義兄は北大医学部の同期生ですが、昭和 40 年前後に北大の医局から派遣されて豊富町立病院で 1 年ほど勤務しておりました。そのころの私は北大農学部助手になりたての研究者のひよこでしたが、医者に比べるとはるかに給料が安いので、豊富の飲み屋さんでいっぱいおごってもらったこともありました。当時のことを思い出すままに書いていると、その活動や絆は太くなったり細くなったりしながら今へとつながっていることを実感しています。

## 1. 会員からのたより

### (1) いっぱいの水

橘 治国



ジョッキ一杯の泥炭水

サロベツ湿原旧ビジターセンター東側で、パイプで採ったいっぱい地下水の色を見てください。澄み切った濃い茶色です。湿原地下水の色です。高層湿原の優占種ミズゴケを中心とした植物群落やその枯死体から水に溶け出した物質の色です。湿原西側のササが繁茂した場所の溝（湿地溝）の水も同じように茶色ですが、湿原東部よりかなり濁っていたり、また薄いときがあります。ササ域では、深いところからこの水が湧き出ているときもあります。湿原に埋もれた昔の川跡を、地下水として遠くから流れてきたに水に違いありません。周囲の田畑などの影響を受けた栄養分の多い水で、笹が繁茂できるに違いありません。ジョッキいっぱいの水の色や、そして水の流れから、いろんなことが想像できます。

ここで水質分析から、一言。ミズゴケ域の茶色は植物から溶け出したフミン質。ササ域の水には、さらに湿原の外から流れ込んだ肥料や土壌から溶け出した養分が混入しています。この地下水には、土壌から溶出したケイ酸も多い。ササは稲科、ケイ酸を好みます。ササ域拡大防止や人為活動による生態系の変化などを抑えるには、このような湿原以外からの水が入らぬように、工夫しなければ。高層湿原に降った雨水を、がっちりためなければ。豊富自然学校の諸君とがんばるぞ。！

下の写真は、湿原東側のミズゴケ域（左）と西側のササ域の調査地点の様子です。



## (2) サロベツへの道 (1) 振老の渡し

高橋 英紀

佐々木 登著の「サロベツ原野」に次のような文がある「次の日(明治40年(1907)6月1日)いよいよ目的地の上サロベツに行くのである。当時は道路といっても、ただ木や笹草などを切り開き、側溝を掘って形をつかってあるだけで、道ははなはだ悪しく、遠別川や天塩川のような大きな川には橋はなく、みな渡し船で越していたのである。天塩川を越して、夕方下サロベツに来た(今の下沼)。今の下沼駅から六百メートルほど北で、道は左に曲がっている。」

ここに出てくる天塩川の渡しの建物は大分朽ち果てつつあるが、まだ残っている(写真-1 天塩川渡船場跡の建物と記念碑。その建物が明治40年当時のものではないと思うが位置は同じである。当時11歳の少年であった佐々木 登氏は、明治40年5月21日に故郷、福島県会津の山奥の寒村を発ち、青森、室蘭、小樽、羽幌へと列車と船を乗り継ぎ羽幌に着いたのが5月29日朝であった。そこから両親とともに歩き、初山別で一泊して、ようやく天塩にたどり着いたのが5月31日であった。その間の苦労は並大抵のものではなかったようであるが、ここでは、天塩川を渡り、下沼に着くまでの足取りを、この地域で最も古い測地に基づく地形図とグーグルの画像、現代の地形図を重ねてたどってみる。

図-1は大正12年測地、同13年印刷発行の5万分1の地形図である。記載にあるように、天塩川に橋はなく、振老で道はとまり、対岸に道が続いている。この振老付近で大きく蛇行していた天塩川も今はなく、河川改修で直線化している。そのあとは現在の地形図(昭和45年編集版)にも残っている(図-2)。

天塩町市街地から天塩川に沿って作られた道路で来ると、振老まで15kmの道のりである。朝7時に天塩町を発ち、荷物を担いで振老まで4時間かかるとして、11時ころに渡船場に着いたであろう。そこで昼食をとり渡し船でサロベツ側に渡ったと思われる。とすれば、午後1時ころ再び荷物を担いで歩き始めたのであろう。そこから道なりに歩くとすれば、下沼まで9kmの道のりである。2時間半かかったとして、午後3時半ころに下沼の曲がり角に着いたと思われる。そこから豊富の市街地までは約8kmである。日が長い6月とは言え下手をすると町に着く前に日が暮れてしまうおそれがある。文中には、夕方に今の下沼駅の北600mのあたりに着き、道は左に曲がったとあるが、大正12年測地の地図にはその道は載っていない。しかし、昭和45年編集版には載っている。おそらく当初は踏み分け道程度の悪路だったので山のすそ野の泥炭地ではない土地を歩く道にその後切り替え、その道が地図に載ったものと思われる。

文をさらに読み進むと「ちょうど曲がり角の辺の道路側に一軒の農家があって、私達が通り過ぎようとする時呼びとめられた。「どこへ行くのだ」と言う。「上サロベツに行く」と答えると、「すぐ日が暮れる。上サロベツまで行けるものではない。夜になると熊が出る。」とある。この人は中村さんと言い、2-3年後に豊富町のモサロに移ったと文中にある。そのため大正の地図にも載らなかったとみられる。結局、佐々木 登さんと両親はサロベツでの最初の日を終え、この中村さん宅で一泊した。その時、馬鈴薯をすりおろして団子にして煮た芋団子をご馳走になったとある。

(次号に続く)

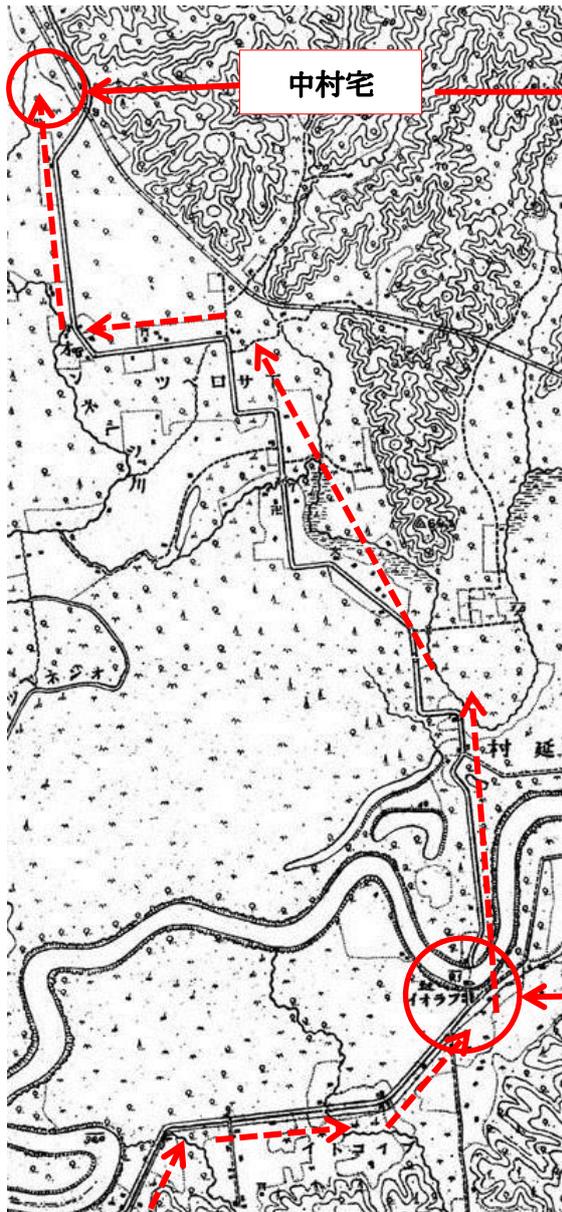


図-1 大正 12 年測図地形図

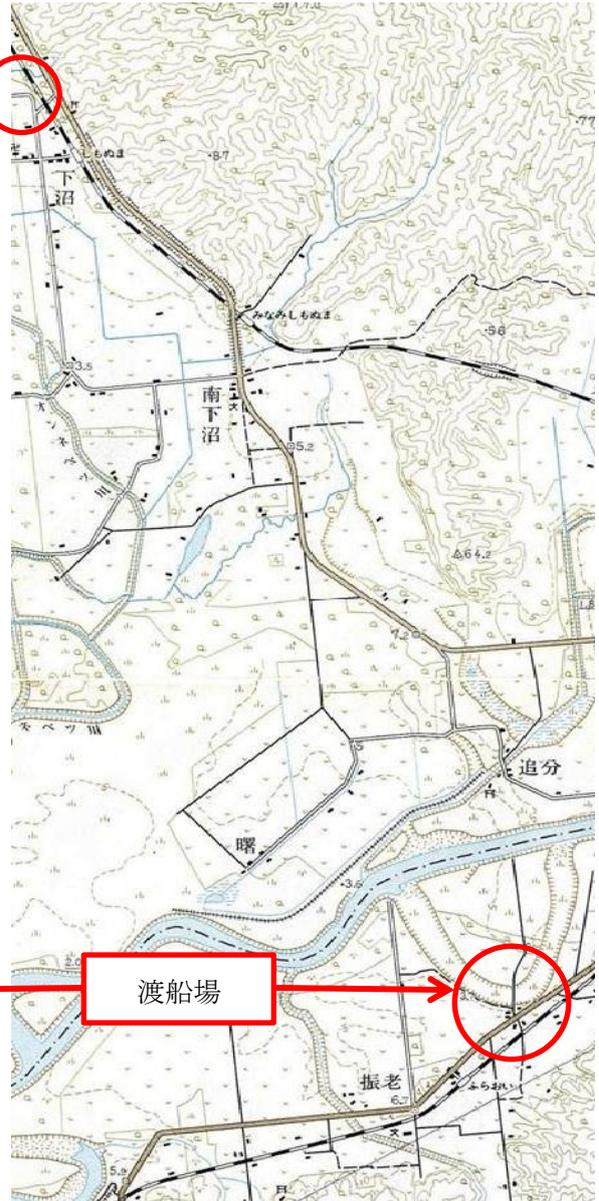


図-2 昭和 47 年編集地形図



写真-1 振老渡船場跡(2008 年 6 月筆者撮影)



写真-2 振老渡船場跡案内版

## 2. 活動報告

### (1) サロベツ湿原保全ボランティア活動

神谷光彦・高橋英紀

#### <はじめに>

サロベツ学会では湿原保全をボランティアの皆様のご協力をいただきながら活動を進めています。活動の対象としている地域はサロベツ湿原の特別保護地区内西部のササが密生した地域です（図



図 2-1 調査地点位置図

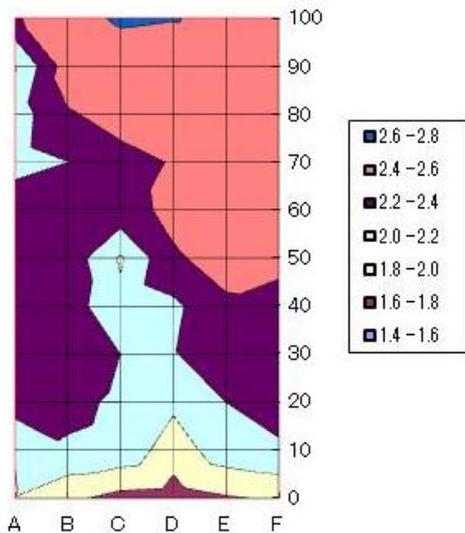


図 2-2 平成 22 年 5 月 1 日の地下水位の分布

2-1)。環境省の許可をいただき、この地区に東西方向 100m、南北方向 50m の方形区を設けました。方形区には 10m 間隔に内径 20 mm の塩ビ管を打ち込んで地下水位測定管としました。管には直径 5 mm 程の穴を沢山あけて地下水が入りやすいようにしてあります。測点には東西方向に 0、10、・・・100、南北方向に A、B、C、D、E、F と番号をつけてあります（図 2-2）。

地下水位の測定方法には長さ 2m、外径 5 mm ほどのビニール管と折尺を使用しました。ビニール管に息を吹き込みながら地下水管の中に下げていきブクブクと音がしたところで止めて地下水管の上端からビニール管先端までの長さを図ります。塩ビ管の頭部の高さは測定してありますので、地下水の位置が計算できます。

ここで、平成 21 年 10 月に塩ビ管を打ち込む作業も含めると、平成 22 年 7 月、平成 23 年 10 月の 3 回、ボランティアの皆様と地下水位観測を行っています。今回はその活動成果の一部をご紹介します。成果の全体は別の機会に報告させていただきます。

#### <地盤・地下水位・湿地溝>

調査地の地盤は場所によって異なりますが、おおむね深さ 3m 付近までは枯れた植

物が堆積した地盤で、その下は粘土混じりとなり、5m より深くなると粘土となります。また、泥炭は体積の 95% 程度まで水によって構成されております。

泥炭の中を流れる水の速さを表す透水係数は、平均して  $4 \times 10^{-8} \text{m/s}$  で粘土と同じくらいです。ミズゴケの生えている泥炭地では表層の透水係数は大きく、深くなるに従って小さくなっていき

ますが、湿地溝では表層から小さく、ミズゴケ泥炭地の 1/1000 位です。

図 2-2 は平成 22 年 5 月 1 日の融雪の影響がまだ残っているときの地下水位の分布です。標高はまだ測定していませんので比高で表しております。地盤の高さは F100 で最も高く、南西方向 (0 の方向) に傾斜しており、D0 が最も低くなってその差は 0.8m 程度です。また、C50 付近が窪地となっています。地下水位の分布を見るとほぼ地形なりに分布しております。

湿地溝の位置を図 2-3 に示します。地表で確認できたものだけを図示しました。その他に伏流している溝も多くあると思います。地下水位の分布でも判るように、水は図の上部から C50 付近に集まり、そこから下部に流れていきます。

図は示していませんが、同年 7 月 3 日の測定を見ると、分布の形状に変化はありませんが、水位は融雪期に比べて 10~30cm 低下しています。C50 付近の窪地の水位低下は少ないので、春から夏にかけて図の上部の水が C50 付近に集まり、湿地溝から流失していくことが想定できます。

つぎに、図 2-4 は平成 22 年 7 月 3 日に湿原ボランティアの皆さまに協力頂いて測定した A 列の例です。5 組 11 名の測定結果です。明らかに測定の誤りと見られるものもありますが、水面を音で確認するので個人の癖もあります。スキーのジャンプの採点方式で最大と最小を除いた中 3 点の平均値を実線で示しました。こうすると、3 点の誤差は 0.2~4.3cm、平均で 1.3cm でした。

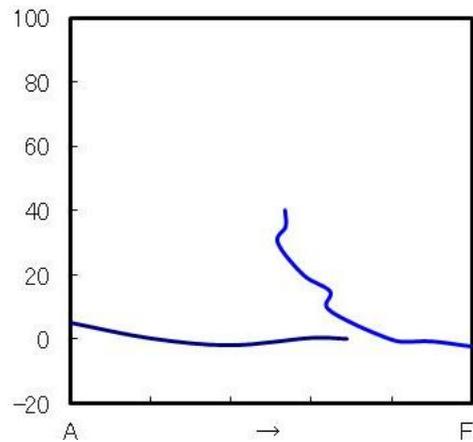


図 2-3 湿地溝の位置

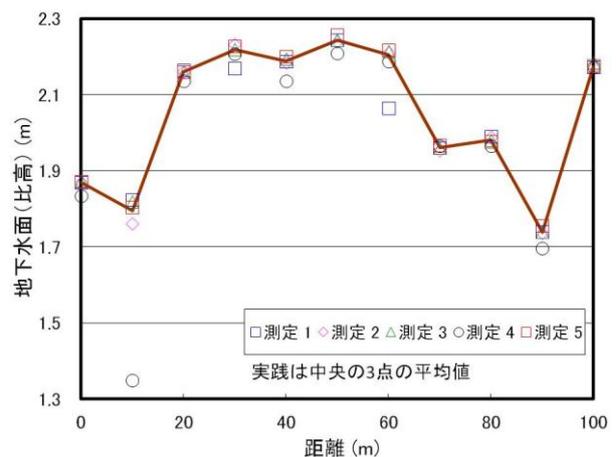


図 2-4 湿原ボランティアによる A 列の地下水位の測定結果

### <植 生>

平成 23 年 7 月 16 日に村元さんに調査していただいた植物種と被覆度を表 2-1 に示します。

表 2-1 調査地点の主な植物種と被覆度

第 1 地点 (西)		第 2 地点 (中央)		第 3 地点 (東)	
ヌマガヤ	40	ヌカガヤ	40	ヌマガヤ	30
ヤチヤナギ(木) 小	6	エゾカンゾウ (細)	5	ヒメシダ	20
ハイイヌツゲ(木) 小	3	キタヨシ	4	ホロムイイチゴ若い	10
		タチマンエンズギ	3	ハイイヌツゲ(木) 小	6
		ハイイヌツゲ(木) 小	2	ノハナショウブ(細)	6

## (2) 活動報告会の開催

サロベツ湿原保全推進協議会の援助によるサロベツ学会主催の活動報告会が平成 23 年 10 月 8 日に幌延町下沼の法昌寺において開催された。

### 1) 地域ボランティアの活動状況について

地域の子供たちを対象に湿原保全のための指導や現地活動を実施したことなどを中心に、稲垣順子会員が報告を行った。



写真 報告会の様子

### 2) インドネシアの湿原の子供たちとの交流について

下沼の子供たちの絵をインドネシア、中カリマンタン州タルナ小学校の子供たちに見せている様子、植樹した樹の高さを測定している様子などを高橋英紀会員が紹介した。



インドネシアのタルナ小学校で下沼の子供たちの絵を見せているところと、子供たちが樹高を測定している様子。

## (3) 野鳥観察会の開催

平成 23 年 10 月 8 日の活動報告会終了後、下沼地区の牧草地に群来するオオヒシクイの群れを観察した。

### 3. 会議報告

(1) 平成23年度総会が下記により開催されました。

場 所 天塩郡幌延町字下沼 81 法昌寺

日 時 平成23年10月8日(土) 13時～14時30分

出席者 9名、委任状(議長)2通

議事録

#### 1. 議長選出

高橋会員(総務)から稲垣会長に議長をお願いする提案があり、異議なく承認された。

#### 2. 議 題

##### (1) 平成22年度事業報告

高橋英紀会員(総務)から平成23年10月7日現在の会員数が52名との報告があり会員名簿の提出があった。引き続き平成22年度事業報告が行われた。議長が質疑を求めたところ特に質問・意見はなく、賛否につき議場にはかったところ満場一致で承認された。

##### (2) 平成22年度会計報告

稲垣順子会員(会計)から平成23年度会計報告を行った。引き続き神谷会員(監査)から監査結果の報告がなされた。議長が質疑を求めたところ特に質問・意見はなく、賛否につき議場にはかったところ満場一致で承認された。

##### (3) 平成23年度事業計画

高橋英紀会員(総務)から平成24年度事業計画の提案が行われた。議長が質疑を求めたところ特に質問・意見はなく、賛否につき議場にはかったところ満場一致で承認された。

##### (4) 平成23年度予算

稲垣順子会員(会計)から平成24年度予算案の説明を行った。議長が質疑を求めたところ特に質問・意見はなく、賛否につき議場にはかったところ満場一致で承認された。

#### 3. 報告事項

##### (1) 市民参加型サロベツ湿原保全グループ活動について(高橋英紀会員)

平成22年度北海道新聞野生生物基金による「住民参加によるサロベツ湿原環境調査」として、平成22年2月、平成23年2月、3月にサロベツ湿原で湿原保全活動、環境体験ツアーを実施した(報告書を本号に掲載)。

##### (2) サロベツ学会会報「サロベツだより」No-2の発行について(高橋英紀会員)



神田長松写真集より

## (2) 事業報告・事業計画

### 平成 22 年度 (2011 年) サロベツ学会事業報告

#### 1. サロベツ学会総会の開催

(1) 日時：平成 22 年 (2010 年) 10 月 9 日 11 時 30 分～12 時 30 分

(2) 場所：天塩郡幌延町字下沼 81 法昌寺

#### 2. 北海道新聞野生生物基金による活動

##### 活動 - 1：第 2 回 住民参加によるサロベツ湿原環境調査と砂丘林湖沼ウォーキングの実施

・期間：平成 22 年 7 月 3 日 (土)～4 日 (日)・場所：サロベツ湿原

・実施状況：札幌圏からの参加者は 16 名で、地元のボランティアも含めると総勢 24 名が参加して、サロベツ湿原特別保護区のササ群落拡大域で地下水位の測定を行った。

##### 活動 - 2：国際湿地の日記念イベント「湿原の森探検、サロベツ&インドネシア」の後援

・期間：平成 23 年 2 月 6 日 (日)・場所：サロベツ湿原

・内容：国際湿地の日 (2 月 2 日) 記念イベントとして 2 月 6 日にサロベツ湿原センターで開催された環境省稚内自然保護管事務所・豊富町などが主催した「湿原の森探検、サロベツ&インドネシア」を後援し、サロベツとインドネシア (カリマンタン) の湿原地域の子供たちへの環境教育活動を紹介した。

##### 活動 - 3：第 4 回 住民参加によるサロベツ湿原環境調査 (サロベツ湿原保全協力と雪原ウォーク) を実施した。

・期間：平成 23 年 3 月 26 日 (土)～27 日 (日)・場所：サロベツ湿原

・内容：新しい試みとして、湿原保全ボランティアに、一般市民の他に北大で学ぶインドネシア人留学生とその家族も加えて、湿原保全活動を実施した。湿原は積雪で覆われているため地下水位観測などはできなかったが、湿原の水を涵養する積雪の量を測定する方法などを、雪研究の専門家に指導してもらい、水資源としての雪の重要性を学んだ。

#### 3. 広報誌の発行

平成 23 (2011) 年 4 月、会誌「サロベツだより」第 2 号を刊行し、会員に配布した

#### 4. 上サロベツ自然再生事業の諸活動への協力

当学会が上サロベツ自然再生事業再生普及部会の一環であり、総会開催、市民参加湿原保全活動に関する「振り返りシート」提出した。

### 平成 23 年度 (2011 年) サロベツ学会事業計画

#### 1. サロベツ学会運営委員会・総会の開催

(1) 日時：平成 23 年 (2011 年) 10 月 8 日 13 時～14 時

(2) 場所：天塩郡幌延町字下沼 81 法昌寺

#### 2. 湿原保全・再生活動を通じた環境教育の実施

2-1. ササ群落地の地下水位、湿地溝位地、植生などの調査実施 (7 月 14 日)

2-2. 第 5 回市民参加湿原保全と野鳥観察会の実施 (10 月 8 日)

#### 4. 広報誌の発行

内容：地域の話題や投稿原稿、市民参加湿原保全とウォーキングなどの活動報告等

時期：来年 3 月ころ

5. 上サロベツ自然再生事業の諸活動への協力  
エコモープロジェクトへの継続申請

(3) 決算報告・事業予算

平成22年度「学会活動に係る事業」会計収支決算書 (単位：円 △：減)

設立初年度「学会活動に係る事業」会計収支決算書	予 算	決 算	増減		備 考
I. 収入の部					
1. 財産運用収入	0	0			21年度～ 500円
2. 会費収入	25,000	6,500	△	18,500	22年度～6,000円
3. 事業収入	0	0		0	
1) 参加費	0	0		0	
4. 補助金収入	300,000	300,000		0	
5. 事業受託収入	0	0		0	
6. 繰越金	21,182	21,182		0	切手@80円×74枚 (佐藤吉一氏寄贈)
7. その他収入	0	10		10	利息
当期収入合計 (A)	346,182	327,692	△	18,490	
II. 支出の部					
1. 事業費					
1) 総会・懇談会等の開催	25,000	0	△	25,000	
2) 会誌の発行	15,000	2,820	△	12,180	
3) 市民参加保全事業	300,000	300,000		0	
2. 事務・管理費					
1) 通信・運搬費	3,000	1,960	△	1,040	※切手5枚使用(残69枚)
2) 文房具等消耗品	3,182	0	△	3,182	
当期支出合計 (B)	346,182	304,780	△	41,402	
当期収支差額 (A) - (B)	0	22,912		22,912	
設立時資産有高	0	0		0	
次期繰越収支差額	0	22,912		22,912	

平成23年度「学会活動に係る事業」会計収支予算書 単位：円

科目	金額	備考
I. 収入の部		
1. 財産運用収入	0	
2. 会費収入	26,000	@500円×52人
3. 事業収入	0	
4. 補助金収入	0	
5. 事業受託収入	0	
6. 寄付金収入	0	(切手@80円×69枚繰越)
7. 繰越金	22,912	平成22年度より
当期収入合計 (A)	48,912	
II. 支出の部		
1. 事業費		
1) 総会・懇談会等の開催	10,000	会場費、資料作成、
2) 会誌の発行	15,000	印刷費(紙代、インク代)
3) 市民参加保全事業	15,000	
2. 事務・管理費		
1) 通信・運搬費	3,000	送料
2) 文房具等消耗品	5,000	封筒、ファイル
3) 予備費	912	
当期支出合計 (B)	48,912	
当期収支差額 (A)-(B)	0	
設立時資産有高	0	
次期繰越収支差額	0	